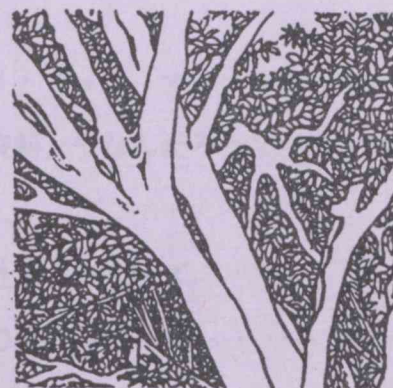


こもいび



文京区立目白台図書館館報

61年秋号
(通巻第9号)
復刻版

も く じ

小川未明と目白台 (3) 2

マイ・ブック マイ・ストーリー

テキヤ・ヤクザの世界から発見するもの..... 5

番外編マイ・ブック マイ・ストーリー

「地域資料」てなんだろう?..... 7

“図書館の仕事”シリーズ

児童室の巻..... 10

“地域探訪”シリーズ (2)

「オルゴールの小さな博物館」の巻..... 13

小川未明と目白台

— 連載3 —

岡上 鈴江

父が再びこの目白台に移り住んだのは、大正大震災の前年の八月もすえの頃だった。女子大の裏通りの護国寺に通じる商店街の中にあるその家は、いかにもさびしがりやの両親が探し求めた家らしかった。子どもたちの健康のためにと牛込の家から、目白駅の奥の閑静なところに移転した両親はさびしさと不便さに耐えきれず、わずかひと夏を過ごただけで、まだ壁土も乾ききらぬ新築中の借家に引越してきたので



散歩にでかける未明

— 2 —

ある。

今度の家の前の空地には里いもが植えてあったが、そのすぐ左手には、酒屋さん、靴屋さん、和菓子屋さんなど同じ構えの店舗がずらりと七、八軒ならんでいて、その一ぱん端が本屋さん。本さんの向うどなりは路地をはさんでもう女子大の長い塀だった。

また、酒屋さんの向い側には古めかしい文房具屋があって、ガス燈がにぶい光で店内を照らしていたことや、その隣の牛乳やラムネを売る店の間の抜けたような白い大きなのれんなどを思いだすと、過ぎ去った歳月の重みをしみじみ感じる。

父がこの家で暮したのは四十才をむかえたばかりの頃から約十年間で、父の長い生涯の中でも一番活力にあふれ、その活動が充実していた年月だったと思う。交友関係も巾が広く、新しい家には絶えず来客があった。

小説を書き翻訳もされていた中島孤島さんは、わたしたちの家から五分ばかりの高田老松町にいらして、時おりご自分が訳された本を下さった。大事にして読むよう

— 3 —

にと父から手わたされた「ギリシャ神話」は、今も心に残っている。

プロレタリア作家で「三等船客」を書かれた前田河広一郎さんも近くにいらしたようで、よくわたしの家にお見えになったし、父はまた、近くの銭湯でもこのあたりにすんでいらした詩人や作家たちと顔を合せていたらしい。毎日銭湯が開くのをまって、まだ十分に沸ききらぬ湯槽にひたりながら、さまざまなことを空想するのが楽しかったという。

「鮫子ヨコの天使」(大正十三年三月)



「赤い魚」(大正十三年九月)



マイ・ブック マイ・ストーリー

📖 テキヤ・ヤクザの世界から発見するもの 📖

4,5年前の冬の夜、自宅近くの赤ちょうちんで体を温めていた時、同郷というきっかけから、隣に座った老人の身の上話を聞いたことがある。普通の老人に見えたが、話の中味は凄まじいものであった。ドスを持ち歩いた青春、殺傷沙汰の絶えない木場や飯場を渡り歩いた話に、魅せられ聞き入ってしまった。その生活が刻み込まれた下腹部と左腕の鋭い傷跡も見せてもらった。この話の中で〔俺は、ひとのためにしか人を傷つけない〕という言葉が、強烈な印象として残っている。今は、孫たちと静かに暮らしていると言って帰っていったが、ひとのために自らの体に傷をつけてまで生きてきた人間と、自己中心で臆病な己を比べ、言いようのないショックを受けてしまった。

ひとの生き様を知ることは、自己を知る良い方法である。とりわけ、このような中途半端でない人生には、何か

引きつけられるものがある。

老人の話のような迫力と響きで読めるものは、テキヤやヤクザについて書かれたものであろうか。テキヤの世界を、主人公の回顧談で解り易く、且つ検証してまとめたものに「わんちゃ利兵衛の旅」がある。様々なドラマを展開する旅の中に一本の筋が見えてくる。また、物を売る時のタンカや芝居の巧妙さは、単純に笑ってしまう。無職渡世と言われ、テキヤと一線を画するヤクザの世界は、組長自らが書いた「山口組三代目田岡一雄自伝」が面白い。また、映画化された「極道の妻たち」は、女の目でその世界を捉えている。

一般的に、この世界は下等に見られがちだが、このような本を読めば読むほど、登場人物に人間らしさや正義を感じるのは何故なんだろう。

老人のキラリとした目の輝きは、忘れられない。(C)

「わんちゃ利兵衛の旅」	神崎 宣武	384
「山口組三代目田岡一雄自伝」	田岡 一雄	H
「極道の妻たち」	家田 莊子	916

番外編マイ・ブック マイ・ストーリー

『地域資料』てなんだろう？

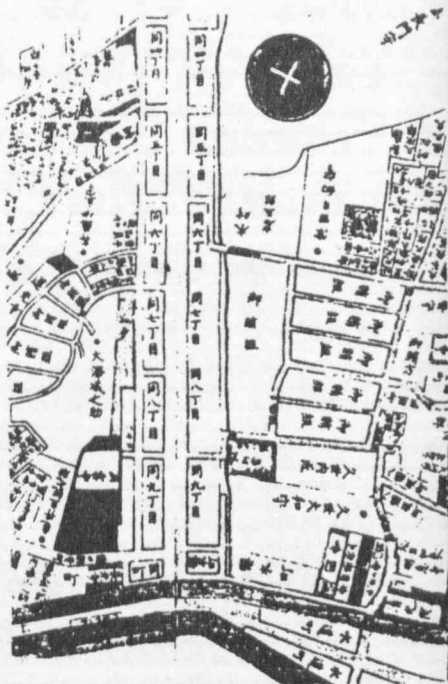
私は学生時代、“後北条氏”の多摩地域での領国支配について調べるために、都立青梅・都立八王子の両図書館へ通いました。それに関する資料が多くあったわけではないのですが、地元の研究家が発行したガリ版刷りのものなどがあって、すごく感動して利用させてもらったことを覚えています。そのせいか地域資料というと、どうしても学校の宿題、大学のレポートで活用されることが多いように思えてしまいます。

もちろん一般的な資料も多く出版されていますし、江戸・東京ブームといわれて久しくなります。そして、地域誌「谷根千」が大きな話題になったり、今年には「季刊東京人」が創刊されるなど、新たな展開がおこっているような気がします。

さて、私が最近特に面白く読めたのが「東京の空間人類学」です。著者の陣内秀信氏は建築が専門です。世界的にもユニークな都市・東京への興味から、実際に現地

を歩いて調査したもので、広い視野にたった都市論といえるでしょう。氏の興味は現在の東京ですが、それがいかに成立してきたのか、歴史的観点にたって解こうと試みているわけです。東京の都市構造は江戸の都市構造の上になりたっており、個々の敷地の空間はあまり変わっていないのが、古地図との対比でよくわかるようです。

歴史的観点といっても、他にも色々ありますし、すべてが江戸から東京へ連続しているわけではないでしょう。しかし、基本はこれだと思います。今までになげなく見過ごしてきた町が、過去の経緯を知ることにより、新たな発見や創造の契



幕末頃の江戸切絵図

な発見や創造の契機が見い出せるのではないのでしょうか。

東京の人は、2代か3代遡れば、その8割が他の地域からの移住者だそうです。そのせいもあり、いわゆる東京人にはふるさとがないといわれます。我々、東京に係わる者たちは、東京にもっと愛着を持ち、東京がよりよい方向へ発展していくように見守らなければなりません。そんな事を考えていくと、地域資料は地域の図書館で最も重視しなければならない資料群で、大げさでなく民主主義の根本となるものでは……などと思ったりしているのです。しかし、ふと目白台図書館の地域資料の棚に目をやると。何と貧弱なことか。これは館が狭い為、資料が歴史や地理の棚などに分散しているせいもあるのですが……。この事については、文京区の図書館全体でも、より一層の充実のために検討中でもありますのでよろしくお願いいたします。他の分野から比べると、地味な分野です。しかし、宿題だけでなくもっと利用が広がって欲しい分野でもあります。

(H)

「東京の空間人類学」

陣内 秀信 291

“図書館の仕事”シリーズ 9

児童室の巻

児童室は、図書館にやってくる様々な子どもたち、ひとりひとりに読書の楽しみを知ってもらい、おもしろい本との出会いのきっかけを作るところです。

私たちはこんなにたくさんの中の本の中から、子どもたちがそれぞれの大切な一冊と出合えるよう、いろいろな形で、楽しい本の紹介をしています。

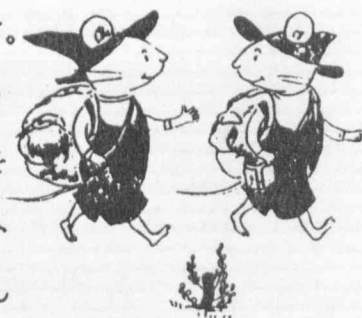
毎朝書架を整えながら、棚のすいている所や寝ころび台の横の絵本架に、手に取って欲しい本を表紙が見えるように飾ります。いつもぎっしりと背表紙を並べて納まっている本たちも、表紙が見えるとずいぶん印象が変わります。特に絵本の飾り棚には、シリーズ物をズラリと並べてみたり、猫の本、月や星の本などテーマを考えて、私たちも楽しみながら集めてみたりします。それでも、毎朝毎朝のことで、今日は何を飾ろうかな——となかなかひらめかなくて困ってしまう日もあります。そうそう

新刊で購入した絵本も、随時このコーナーに飾っていますので、ご注目ください。

階段を昇って二階にたどりつくと“ぐりとぐら”の絵が貼ってありますね。あれは『ぐりとぐらのえんそく』から取ったものです。今のところ、ぐりとぐらとちっちゃな木の切り株があるだけですが、だんだんに木やくまさんなどの登場人物を増やしていくつもりでいます。

絵本の飾り棚の上の掲示板には、今ゆかいな4つの詩が書いていてあります。それぞれの出典も記してあり、関心を持った人がすぐに借りられるように、その本をそばに置いておきます。この前は“ことばあそびうた”を書きましたが、年に何度か書き変えて子どもたちに注目してもらおうよう考えています。

それから、できるだけフロアへ出て行きなんとなく本をさがしていそうな子のそばへ行って、「ねえ、この本読んだことある？おもしろいよ」



とか「どんな本さがしてるの?」と聞いてみます。それから「何が出てくる話が好き?」「あなた何年生?」等いろいろ聞きながら、自分の知っているあまり多くもない本の中から、さて何を薦めようかと頭をめぐらせ、それでも思い浮かばない時には、トラの巻(“児童担当者の必読書リスト”または“〇年生に薦めたい本のリスト”など)をバラリとめくって、「そうそうこれがあった」と書架へさがしに行きます。ところが、せっかく“この本を”と思った本が貸出中で棚になかったり、ご本人のお気に召さなかったり……。「やっぱり自分でさがすくらいいいわ」などと言われてしまうこともしばしばです。気に入って借りていったものと思っていたら、いつのまにか、その本が他の棚にそっと返されていたり……。

子どもは大人の思うようにはならない——これが実感です。それでも、断わられても、断わられても「これは絶対おもしろい本なんだ!」と自信を持って、そのうちにまた、この本と出合える子を気長にさがすことにしましょう。

(A)

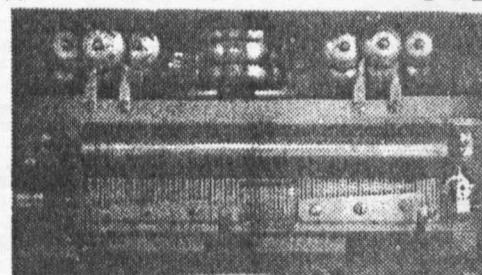
“地域探訪”シリーズ(2)

「オルゴールの小さな博物館」の巻
護国寺の交差点と日本女子大の間の不忍通り沿いに
「オルゴールの小さな博物館」があります。

土曜日あるいは日曜日の午後ここら辺りで、幸せに満ちたりた様子の人達に出会ったことはありませんか。その人達は、多分この博物館から出て来たに違いないのです。何がそんな気分にしてくれるんだろう?。訪れてみて、その気持ちがよくわかりました。ここでは、実物のオルゴールを目の前で聴かせていただけるのです。しかもそれは、私達の想像を遙かに超えたものなのです。今回は、ここで世界のアンティーク・オルゴールをご主人

と集められた
名村嘉也子
さんに、お話を
伺いました。

ご主人の名



ベル・ドラム・オルガン付きのオルゴール
スイス

村義人さんは、その著書「オルゴールの詩」の中で“誤解を恐れずにいえば、現在の「オルゴール」は、1830年代から1920年代にかけて、隆盛を極めた「オルゴール」のなれの果て”であるとおっしゃっています。我々が知っている「宝石箱」などのオルゴールは、それなりに可愛い音をだしてくれますが、本物を聴いてしまうと、それは「なれの果て」のおもちゃにすぎないのかもしれない。

そもそも、名村さんがオルゴールを集める切っ掛けになったのは、17年前、ご両親がヨーロッパ旅行のおみやげに買ってきた小さなディスク・オルゴールでした。このオルゴールは名村さんの子供さんたちにと買われたものだったのが、名村さん夫婦のほうで魅了されてしまった。そして、本物の音はどんなだろうと思っていたところに、ちょうどあるデパートでヨーロッパ民芸展があることをチラシで知り、勇んで行ってみたところ、素敵な音だったので、さっそく本物を購入してしまったそうです。それ以来、ご夫婦はオルゴールの世界にのめり込

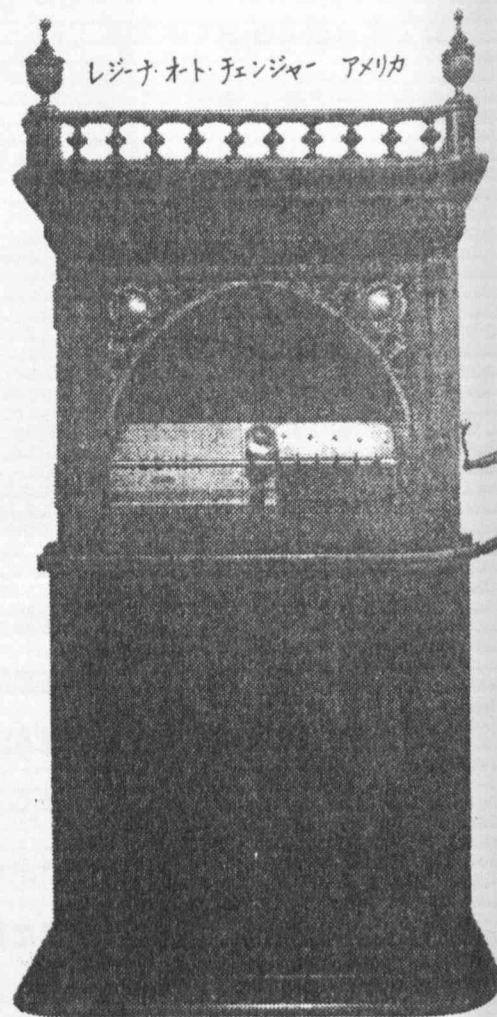
んでいくわけです。義人氏は凝り始めると、とことん突き詰めるタイプですが、まさか博物館を開くとは思っていなかったでしょう。その名村さんに、大きな影響を与えたの



カリオペディスク・オルゴール ドイツ

は、そのとき其のオルゴールを扱っていた吉原淳次さんという方でした。当時としてはめずらしく、アンティーク・オルゴールのみを輸入しており、オルゴールについても造詣の深い方だったそうです。このときオルゴールに関する本も何冊か譲ってもらい、その本により、義人氏は非常にメカニックに興味を持たれたそうです。読み進んでいくうちにそれぞれのオルゴールについての説明が“天使の声のような音色”などと表現されており、その

形容の素晴らしさにひかれて「これはどんな音なんだろう」と次々に本物を聴きたくなり、それからの10年間位は夢中で集めてしまったそうです。その頃は今のようなアンティークブームにもなっておらず、今ほど高価ではなかったので求め易かったとおっしゃってましたが……。これはもちろん、吉原さんとの親交によ



ることも大きく、情報も早く入手できたのでしょう。それにしても、名村さんの熱中ぶりには、驚くばかりです。

さて、そんなふうを集めたので、どの部屋にもオルゴールがいっぱいで、掃除をしながらとか、ほとんど生活の一部として聴いていたそうです。そして、名村さん宅を訪れた方に演奏してあげると、皆さんが喜んでくれた。特に、義人氏の知人には、氏が日頃「オルゴールを集めるのが趣味です。」と言う言葉に対しての誤解を見事に拭い去ることが出来、感激してくれたそうです。そんなこともあって、自分たちだけで持っているのがもったいないような気がしてきたし、あまり知られていないアンティーク・オルゴールの素晴らしい音を一般の方にも聴いて欲しくて、博物館を開くことにしたそうです。

名村さんは、いわゆる博物館に対して、あまり良い印象を持っておられない。それは、生活の中で使っていたものですら、ただ陳列してあるだけということに大きな不満があるようです。そこで、ここでは実物の演奏をしているのです。ヨーロッパの博物館でも、これ程実物を

聴かせてくれるところはないので、この点については自信をもっているそうです。ここには現在約100台ほど所蔵しており、一度に全部は展示しきれないので、月毎にテーマを決めて四部屋に分けて展示されます。博物館になる前は、名村さんたちが日常生活をしていらした場所であり、アットホームな雰囲気演奏が楽しめます。しかし、実物を聴かせてもらう我々には有り難いのですが、維持していくほうは大変なのです。19世紀の職人はもはやおらず、部品もないわけですから。そこで名村さんの気持ちも、ただ好きで、自分達が楽しむために集めていた始めの頃とは少し変わって来たそうです。どんどん鳴らして皆さんに本物の音を聴いてもらいたいと思う反面、後の人のために維持していかなければならないという責任感もあり、板挟みの思いでいるようです。

現在では「オルゴールに対して以前のような情熱は無くなった」そして、「すきで、この仕事をやっているとはとても言えない」ともおっしゃってる名村さんの支えは、お客さまに喜んでいただけることだそうです。そし

て、お客さまによって様々な反応がみられるので、それも実に楽しいそうです。そのため、新しくオルゴールを求めるときも、自分たちが楽しむことより、お客さまのことを先ず考えて、喜んでもらえそうなものを選んでしまおうそうです。

手品をする少年

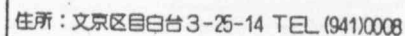
なお、この見学には予約が必要です。開館日は土曜と日曜で各々3回の開演です。1回1時間余りの行程で、館の方がやさしく説明してくれますので、幸せいっぱいになるだけでなく、知識もいっぱいになります。

これからも、多くの方が幸せな気分にあふれるように、オルゴールたちには元気に演奏し続けて欲しいものです。(H)



シリンダー・オルゴールは、櫛歯の歯を金属の円筒に植
えこんだピンで弾くことによって音をだします。より
良い音を追求して、回転ムラをなくしたり、鉛のオモリ
を取り付けて低音を強調するなど、様々な改良を加えて
いきました。しかし、シリンダーにピンを埋め込む作業
は、熟練した技術が必要なので、大量生産ができないな
ど、いくつかの欠点がありました。そこで登場したのが
ディスク・オルゴールです。これは、薄い鋼製の円盤を
プレスするだけで、曲を記憶させることができるため、
大量生産も可能でした。ディスクの突起でスター・ホイ
ルに伝え、それが櫛歯を弾くこの方法は音質も向上させ

さて、日本でオルゴール
と言うと以上のものだけで
すが、自動演奏装置の範疇
にはいるものとして、スト
リート・オルガン、自動ピ
アノがあります。また、オ
ルゴールつきのかわいい自
動人形（オートマタ）もあ
ります。



開館	土曜日	1:00	3:00	5:00
	日曜日	12:00	2:00	4:00

- 21 -

木枯らし吹く季節に、「秋号」を発行するという事態に、またまたなっていました。また、前号（8号）の11ページの本文1行目と2行目の“だった”が、重なっていました。お詫びして、訂正させていただきます。

このページはあくまで、あとがきのページです。ですから、早めに編集を終えて、エスプリに富んだ文をここに書いてみたいナァと思っているのですが、なかなか難しいようです。

~~~~~

昭和61年11月29日 発行

平成 5年 6月20日 2刷発行

編集・発行 目白台図書館 ☎(3943) 5641

①112 文京区関口3丁目17番9号

~~~~~

こもれび



文京区立目白台図書館館報

62年晩冬号
(通巻第10号)
復刻版